

はじめに

元々関東の出で、京都、兵庫と移り住んだ私が、奈良の地に足を踏み入れることとなったのは、今から二〇年余り前のことである。高畑の旧志賀直哉邸隣に住んでいた洋画家・故中村義夫の個展を担当することになった縁で、以来近鉄やJRでうたたねしながら度々奈良に通うことになった。中村のアトリエはもとより、以前は文化会館に併設されていた旧県立図書館、後には図書館を資料収集のために訪れ、県立美術館、国立博物館、飛鳥園などにも赴く機会をもった。個人的にも業務でも特別の縁はなく、そういえば何度も往復しながら数ある観光地にもまともに接していない奈良に毎年足を運ぶ機会を与えてくれるのは、中村とそれを取りまく高畑の文化的土壌との出会いからであり、さらには今の白樺サロンの会の活動のお蔭である。私が奈良に興味を有するのは、古の都の栄華や遺産ではなく、近代の文化的営為であるが、そういう意味で大正、昭和とすぐれて文人的雰囲気醸し出した高畑の地に私が引きつけられたのは偶然ではなく、また幸いなことであった。

志賀邸に至る坂道は、二十年前には無用であった息苦しさで足の疲労を覚えさせる。とはいえ、そんな歩みの重さは、季節の移ろいや木々の匂いに心を寄せるゆとりをももたらしてくれている。画家たちがそこに自然の力を見、古に連なる神秘を感じ、時にヨーロッパの香りを懐かしんだ奈良の近代を見つめ直すには私にとっても奈良にとっても、ちょうどいい時期が来ているように感じられるのは、現実なのか、錯覚なのだろうか。

白樺サロンの会

平瀬 礼太